

校長室の窓から（^o^） 「春の陸上大会」によせて

中学時代、引っ込み思案で物静かな子どもだった私が、唯一自分を表現できるものがスポーツでした。

負けた時に父親にプレーを指摘されてから、試合の様子や結果を両親に知られるのが嫌で「試合を見に来ないで」と言い放つ可愛げのない子どもでした。それからは父が試合の応援に来ることはありませんでした。

練習に明け暮れても目標に届かず、思うように勝てない日々が続き、悔しくて泣きながら練習したこともありました。しばらくして、はじめて表彰台に乗った時のうれしさは今でも覚えています。その日、家に帰ると父に「試合どうだった？」と聞かれ、私は「うん。」と丸めた3位の表彰状を差し出しました。その表彰状を広げ、大きな声で「がんばったなー！」とうれしそうに立派な額に飾ってくれている父を見ながら、何だか涙がこぼれました。うれしかったのです。今となれば、あの時、無口な私を口うるさく言わずに見守ってくれた親の優しさを理解できますが、当時は「ありがとう」の一言さえも伝えることができませんでした。

言葉にせずとも、親が子に抱く愛おいしい慈しみの「念」は、きっといつまでも子どもの心に残っています。

